

平成 21 年度 特別研修 研究報告書

興味・関心を高める高校世界史Bの指導の工夫
—中学校社会科の学習内容の活用を通して—

高校教育研究係

安 達 淳 (高等学校教諭)

I 主題設定の理由

「日本」が「世界」の一部である以上、世界の歴史は日本の歴史を内包するというべきであろう。しかしながら、高校世界史の指導内容は実質的に外国の歴史である。わたくしの経験から、世界史に対して、外国史だからこそ興味を感じる生徒と、外国史だからこそ興味を感じない生徒のどちらも常にいるといえる。

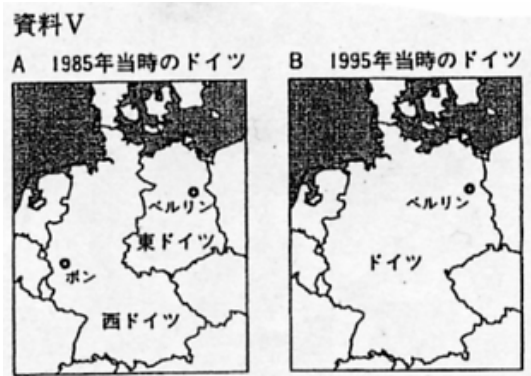
現在、高等学校で必修になっている世界史ではあるが、中学校社会科において外国史の扱いが少ないこともあり、生徒にとっては日本史よりもなじみが薄く、必ずしも興味・関心がないわけではないとしても、難しい科目と感じられるようである。世界史を受験科目として選択する生徒数が日本史よりも少ないことはその証左の一つであろう。複数の地域の歴史の同時展開、片仮名の長い固有名詞等も世界史への苦手意識を助長しているようである。そこで、まず生徒の世界史への親近感を喚起し、かつ、世界史に対する興味・関心をより高めたいと考え、主題を設定した。

副題については、中学・高校を通じて教科書を精読していない生徒が多く、教科書の活用が不十分ではないかと推察したこと、加えて、次に示す事由により設定した。

—事由—

平成 20 年の群馬県公立高校入試の社会の問題に、以下の設問が出題された。

資料Vについて、次の①、②の問いに答えなさい。



- ① ドイツがAからBに変化するきっかけとなった、ベルリンでおこった象徴的なできごとは何か、簡潔に書きなさい。
- ② ドイツがAからBに変化した時代の国際情勢について、「冷戦」という語を用いて、簡潔に書きなさい。

翌日新聞紙上に公表された解答は以下のとおりであった。

- ① (例) ベルリンの壁がとりこわされた。
- ② (例) ソ連が解体し、冷戦が終結した。

高校世界史の指導内容から見ると、②の解答例に問題がある。米ソ首脳（ブッシュとゴルバチョフ）がマルタ島沖における会談で冷戦終結を宣言したのが1989年12月、ソ連が崩壊（解体・消滅）し、独立国家共同体が成立したのが1991年12月であるから、②の解答例は、少なくとも、「冷戦が終結し、ソ連が解体した。」としなければ不適切であると思われた。

勤務校で使用している世界史Bの教科書『新詳世界史B』（帝国書院）の記述を見よう。

「1989年12月には、ゴルバチョフとアメリカ大統領ブッシュ（父）がマルタ島で会談し、冷戦の終結が宣言された。」

「9月、連邦全体を束ねていたソ連共産党の解体をゴルバチョフが宣言し、12月には全共和国が連邦離脱を宣言した。こうしてソ連は解体し、旧ソ連領の大半はロシア連邦を中心とする独立国家共同体に再編された。」（以上同書263頁）

ところが、中学校社会科（歴史的分野）教科書を確認すると、『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍）に以下の記述があった。

「1989年から1991年にかけて、東側陣営の崩壊という大きな動きが起きました。東欧諸国の民主化、東西ドイツの統一、ソ連の解体によって、冷戦が終わったのです。」（同書213頁）

中学校と高校とで学習内容が異なるのは当然であるとしても、このように相違するという認識が欠けていたことをわたくしは反省した。それと同時に、高校における世界史離れが問題視される現下、中学校と高校との学習内容の相違を学習指導に活用する方向で、授業を工夫する必要をも感じた。

以上の理由から、世界史の授業に中学校と高校との学習内容の比較作業を取り入れれば、世界史に対する生徒の興味・関心を喚起し、学習内容のよりよい理解に資するのではないかと考えた次第である。

II 研究のねらいと課題解決策

高校世界史の授業において、生徒に中学校教科書と高校教科書を読ませ、比較させることで興味・関心を高めることがねらいである。教科書本文を丁寧に読ませることは世界史に対する知識・理解を深め、さらに、中学と高校の学習内容の共通点と相違点について考えさせることは、生徒の興味・関心を高めると考える。

III 課題解決のための具体的実践

平成21年度、わたくしは勤務校の2年生文系（男子93名）を対象に世界史B（3単位）の授業を担当し、そのなかで研修のための授業実践を行った。実践に際しては、中学校の社会科（歴史的分野）の学習が日本史中心であり、古代史・中世史においては特にその傾向が著しく、高校世界史の学習内容は多くの生徒にとっては、高校入学後初めて学習するものであって、両者の学習内容を比較する材料が乏しいという問題があった。

中学と高校との比較に適切な単元は、黄河文明からモンゴルによる元の成立に至る中国史である。それゆえ、①秦漢帝国、②魏晋南北朝時代、③隋唐帝国、④モンゴル帝国の4単元において、授業の導入部分に中学校の教科書記述に関する資料と以下のようなシート「世界史特別課題」を配付し、生徒に中学校と高校との学習内容を比較させた。

この比較作業が歴史の学習に対する生徒の興味・関心を喚起したか、また、それはどのようなものであったかを「世界史特別課題」の第4・5問、特に第5問への回答によって検証する。

世界史特別課題

1 課題

高校教科書(△～△頁)と中学校教科書(配布プリント)との〇〇に関する部分を比較し、高校教科書には書かれている一方、中学校教科書には書かれていない事柄を、下記の表を参考にして分類し、できるだけ多く挙げて下さい。

時期 (when)	
場所 (where)	
人間 (who)	
事業 (work)	

2 高商用教科書△～△頁を読み、意味の分からない言葉を抜き出して下さい。

(歴史用語ではなくともよい)

3 本日の授業の中で、疑問に感じた部分、または、わからなかった部分があれば、挙げて下さい。

4 本日の授業の中で、一番重要であると感じた部分を挙げて下さい。

5 その他 今日の授業の感想を自由に書いて下さい。

IV 研究の成果と課題

1 成果

単元の導入部分における中学校教科書と高校教科書との比較作業は、多くの生徒に好評であった。以下、①～④の全4回、のべ371名の文系男子2年生から寄せられたシート「世界史特別課題」第4・5問への回答の中から公約数的回答を、生徒のいわば生の声のまま、紹介する。

- (1) 授業における作業の大切さ
 - ・作業をすることで、内容が頭に入ってよかった。
 - ・自分で書き出したことで鮮明に記憶できた気がする。
- (2) 中学・高校の学習内容の相違の意識化
 - ・高校の教科書ではかなり具体的に内容が書かれていた。中学のほうではくわしく書いておらず、おおまかに書いてあり、内容も簡単。
 - ・中学では2、3行で済んでいたことが、高校では2、3ページにまで拡大していたのはとても驚いた。
今まで中学で習った同じ範囲でも高校だとかなり詳しくなっているので面白いと思った。
 - ・高校の内容の深さを知ることができた。深く内容を勉強していく高校の世界史はやはりおもしろいです。
 - ・中学のときよりもより深い内容になっているので、私が学んできたものはまだまだ浅いものだったと思った。深い知識を得て、それぞれの時代の特徴を詳細にとらえられるようになりたいと思った。
 - ・中学時代は楽でよかった。
- (3) 大学での学びへの展望
 - ・勉強が難しくなっていく話は個人的にタメになったと思う。中学・高校・大学の違いがよくわかった。
 - ・大学ではもっと内容が深くなるらしいので、高校の内容をバッチリにしたい。
- (4) 中学・高校それぞれの学習内容の性格

- ・中学校の教科書と高校のそれとの比較は、要点をつかむには良いことだと感じた。
- ・高校の教科書と中学の教科書を比べることで、より分かりやすくなった。

(5) その他

- ・5Wをしっかり使って理解を深めたらいいと思う。

(1)に見られる感想は比較作業というよりも作業一般を評価するものであって、平生の授業が講義に偏っていたことを改めて反省した。(2)に挙げた感想から、中学・高校の学習内容の相違を意識化したことに対する生徒の率直な実感がうかがえる。(3)に見られる感想は、中学校と高校の学習内容の相違を例として、高校と大学の相違について説明したことへの反応である。わたくしは、授業の際、中学校と高校の学習内容の相違を単なる単純・複雑、また、難易度の差としてではなく、中学校が概論、高校が具体的事例の追求とも説明した。(4)の感想を書いてくれた生徒にはわたくしの真意を理解してもらえたと考えたい。

さらに、授業実践後、生徒 89 名に下記のアンケートを実施した。

ーアンケートー

中学校と高校の教科書の比較作業をしたことで、あなたの世界史に対する興味・関心は上昇しましたか。以下の①～④から最もあてはまると思うものを一つ選んで下さい。

- ①非常に上昇 ②多少は上昇 ③上昇せず(変化なし) ④低下

結果は、下表のとおりであった。

	①	②	③	④
回答者数(回答率)	4名(4.5%)	34名(38.2%)	50名(56.2%)	1名(1.1%)
回答者の2学期評点の平均	56.8点	52.3点	43.1点	54点

興味・関心が増したと感じた生徒は、①と②の回答率を合計し、42.7%にのぼる。56.2%の生徒は「上昇せず」と答えているが、2学期の評点を回答者の世界史の学力の判断材料とすると、上昇を感じた生徒は変化なしと感じた生徒よりも学力は高い。中学校と高校の教科書の比較作業は、成績上位層の生徒により有効な策といえよう。

2 課題

以上から、中学校と高校との学習内容の比較作業が、一定程度、世界史の学習に対する生徒の興味・関心を喚起し、学習内容のよりよい理解に役だったと考える。

今回の実践では、高校世界史と中学校社会科の歴史的分野の学習内容との比較を扱ったが、地理的分野・公民的分野に関しても、高校世界史の学習に資する比較の素材がある。生徒に対する比較作業の指導方法の改善とともに、その方向への展開も今後の課題である。

さらに、近現代史の単元において、第二次世界大戦後史を指導する際、生徒には中学校と高校との教科書を比較させるだけでなく、前掲の平成 20 年の群馬県公立高校入試の国際情勢の変化に関する設問及び公にされた解答例等の高校入試問題も教材として、中学校・高校の学習内容、また、高校入試・大学入試の性格、それぞれの相違の意味について考えさせたい。

地理歴史（世界史B）学習指導案

群馬県立〇〇高等学校 〇〇 〇

1. 主 題 武帝期を中心として見る漢帝国の外征と内治
単 元 第4章 東アジア世界のあけぼの ②秦漢帝国と東アジア
2. 教 材 教科書：新詳世界史B [46 帝国 世B - 020]（帝国書院）
副教材：最新世界史図説タペストリー七訂版（帝国書院） その他
3. 日時・教室 平成21年9月14日（月）第2時限 於2年3組教室
4. 生 徒 2年3組（文理混合クラス）文系男子（12名）
12名全員が授業に積極的に参加できる資質を備えている。
5. 指導計画
- | | | | | |
|----------------|---------------|--------------|-----|-----|
| ①中華文明
の形成 | } | 東アジア世界の風土と人々 | 1時間 | |
| | | 農耕都市文明のおこり | } | 1時間 |
| | | 殷と周 | | |
| ②秦漢帝国
と東アジア | } | 春秋・戦国の変動 | } | 1時間 |
| | | 秦の統一 | | |
| | | 漢帝国の外征と内治 | 1時間 | |
| } | 漢代の社会と文化 | } | 1時間 | |
| | 東アジア周縁地域の国家形成 | | | |

6. 考察

（1）単元の指導の目標

「東アジアと内陸アジアの地理的特質、中華文明の起源と秦・漢帝国、遊牧国家の動向、唐帝国と東アジア諸民族の活動に触れ、日本を含む東アジア世界と内陸アジア世界の形成過程を把握させる。」

高等学校学習指導要領（平成21年3月9日告示）より

黄河文明という用語は、長江流域の農耕文化・青銅器文化の発見と研究の進展などによって、中華文明、また、中国文明という用語に従来の位置を譲りつつあるとはいえ、さしあたり黄河文明が東アジア世界を形成した中華文明の最重要部分であるといっても誤りではないだろう。それゆえ、黄河文明は、オリエン特文明やインダス文明と同様、ユーラシア大陸に成立した人類の最古期の文明であるが、わが国が属する東アジア世界の起点をなす点で、日本人にとって、他の古代文明以上に重要な意味を持つ文明と言えよう。

単元の指導においては、黄河文明の成立から殷・周・春秋・戦国時代を経て秦漢帝国の発展に至る古代中国の歴史を概観しつつ、東アジア世界と他の地域世界との比較を通して、まずは生徒にその特徴が把握できるよう図りたい。さらに、生徒が、古代中国史の基本的知識を身に付けるだけでなく、世界史への興味・関心を高めると同時に歴史と文化に対する認識を深め、併せて歴史の学習の重要性を理解することを目標としたい。

（2）本時の指導について

- ① 本時の主題は「武帝期を中心として見る漢帝国の外征と内治」であって、指導内容は漢代の通史であるが、その中心は武帝の時代にある。武帝期に始皇帝によって創出された皇帝専制体制が完成し、また、半世紀を超える武帝の治世中には漢帝国の国力の変容があったが、後漢時代にも前漢と共通する興亡盛衰のパターンが認められよう。以上から、素人目には、武帝の時代に秦漢帝国の問題点が集約されているとも映る。使用教科書では、前漢・新・後漢という王朝の変遷が一続きの漢代史としてとらえられているといえる。指導内容の中心を武帝期におくことは教科書の漢代史の把握に合致するであろう。

② 本単元、とりわけ漢代は高校世界史において際だってエピソードが豊富である。もとよりそれらに逐一コメントを加える余裕はなく、本時の指導においても、まずは生徒に教科書レベルの基本的な史実を習得・理解させたい。その上で生徒の歴史的思考力を涵養するためには、武帝の経済政策、特に商業政策に焦点をあてることが有意義であろう。武帝期の漢帝国の国力の背景としては何よりも中国本土における農業生産力の発展を挙げるべきであろうが、武帝の権力と商業との関係に着目することが漢王朝の特質を把握する上で有効であるように思われる。前漢の対外積極策には通商路の確保という意図があった。漢は通商路の獲得・維持のため財力・兵力を費やし、それが財政難を引き起こした。財政再建策として実施された経済政策が、均輸・平準、塩・鉄・酒の専売という商業的利益、とりわけ流通部門からの収奪にほかならない。このような視点の提示によって、生徒の学習に資するよう配慮したい。

③ 今年度、県総合教育センターで受けている地理歴史教育に関する特別研修員研修において、中学校の学習内容を活用し、生徒の世界史に対する興味・関心を高める指導方法の追究を研究主題として設定した。本時の授業はその研修の一環でもある。

7. 評価

本時のねらいは、まずは、武帝期が漢代の重大な転機であったことを生徒に理解させることにある。評価のために定期考査・実力試験を活用することは無論であるが、4観点からする評価規準をも考慮し、授業中の発問に対する応答等も判断材料とする。

8. 指導の展開過程

	指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点	評 価
導 入 5分	○主題の提示	○本時の主題を確認する。	○武帝期に秦漢帝国の問題点が集約されていることに留意させる。	
展 開 I 20分	○作業の指示	○漢代に関する中学校社会科歴史的分野と高校世界史とを比較する。 ○上記両者の相違の意味について考える。	○出席の生徒全員に報告させることによって、授業への参加意識を高めるとともに、生徒評価のための重要な判断材料とする。	・「関心・意欲・態度」 ・「表現・処理」
展 開 II 20分	○漢代史概観 ○前漢 ○武帝期 ○新 ○後漢	○教科書(42～43頁)の音読・黙読。不明な用語をチェックする。 ○教材を参照しつつ、説明を聴き、必要に応じてメモをとる。	○取り上げる諸事象の因果関係を明らかにするよう努める。 ○副教材の歴史地図(80～81頁)を参照させ、漢帝国の版図を確認させる。	・「知識・理解」 ・「関心・意欲・態度」
終 結 5分	○まとめ	○板書等によって本時の学習内容を確認する。	○本時の総括・次時への展望に適切な生徒からの指摘を選ぶ。	・「関心・意欲・態度」